

## B—72 被服製作における標つけ方法について

香川大教育 田中 正子

1. 近年、衣料材料が豊富になり、被服製作の際従来の経験的方法で標つけをすると、製作途中で標が消滅したり、布を損傷することがあった。そこで本研究は、材料に適した標つけの方法および標を保たせる条件について実験したものである。

2. 繊維組成の異なる10種の布を試料とし、標つけ方

法・標つけの方向・布の枚数・標つけ後の試料の保存状態などを直交表にわりつけて、各試料の標のつき方の効果を求め、あわせて標つけによる強度の変化を調べた。また、その後1か月間の効果を求めて、諸条件と標の保ちの関係を考察した。

3. 次のような成果を得た。

(a) 木綿ブロードなど、いずれの方法でもよく標がつくものとそうでないものがある。

(b) 焼こてによる標は、どの布にもよくつくが、角ベラ、ルレットではつき難い布がある。

(c) ルレットは、布を損傷しやすい。

(d) 耐熱性の乏しい布にこてベラをする場合には、低温で行なわないと布を損傷する。

(e) アセテートなど標つけをすることによって布の損傷の著しいものがある。

(f) 一番上の布には、標がよくつくが、下の布にはつき難くまた消え易い。

(g) 標つけ後、布を乾燥して保つと標は消え難く、特に吸湿性の布ではその効果が著しい。

(h) 焼こてによる標は、他より消え難い。

(i) 合成繊維の布は、保存中の荷重で標が消え易くなる傾向がみられた。